



呉空襲を考えた

第45号

戦争中から終戦後にかけての呉市を舞台にした、こうの史代さんの漫画を原作とするアニメ映画「この世界の片隅に」の大ヒットで、呉空襲への関心が高まっています。かつて「東洋一の軍港」と呼ばれた呉は1945年になって米軍の爆撃を繰り返し受けました。

海軍の関係者だけでなく子どもたちも含め、多くの市民が犠牲になりました。特に、45年7月1日夜から2日未明にあった市街地空襲の被害は死者約2千人ともいわれ、むごいものでした。落とされた焼夷弾による火災に焼かれるだけでなく、逃げ込んだ防空壕での窒息死も相次いだのです。

あれから72年。空襲を体験した人たちの高齢化が進んでいます。ジュニアライターたちが空襲の歴史を学べる場所を訪ね、惨劇の思いを巡らせました。

生存者の声聞いた

呉空襲の体験者から証言を聞くことができました。宮本澄枝さん(90)です。呉市の和庄公園の前には戦時中、防空壕が五つ並んでいました。7月1日夜からの爆撃が激しさを増す中、両親と妹の4人で防空壕へ逃げました。



空襲の痕が残る龜山神社のこま犬を指さす朝倉さん(撮影・伊藤淳)

市内の戦跡歩いた

呉市内には現在も使われている旧海軍施設のほか、爆撃の跡が残る神社や空襲の犠牲者を弔う慰霊碑などがあちこちにあり、空襲の調査を長年、続けてきた「呉空襲を記録する会」代表の朝倉邦夫さん(80)は、宮原の案内で、戦跡や「この世界の片隅に」の舞台を歩きまわりました。

被害の爪痕 今もなお



空襲で犠牲になった女学生たちを慰霊する「殉国ノ塔」。高台にある龜山神社に奉納された歴史あるこま犬に近寄ると、片方の台座に亀裂が入り、石が焼けただれて変形しています。

を通過していたのかを考えました。高台にある龜山神社に奉納された歴史あるこま犬に近寄ると、片方の台座に亀裂が入り、石が焼けただれて変形しています。7月の市街地空襲で焼夷弾が爆発し、高温のナパームが飛び散った跡です。朝倉さん「こま犬は呉空襲を伝える数少ない生き証人と教えてくれました。」

「この世界」舞台 繰り返す爆撃

供養地蔵の前で、防空壕の体験を語る宮本さん(撮影・川岸言織)



空襲が終わった後、外に出た宮本さんは、そうきんを絞った水を飲んだそうです。周囲には防空壕で亡くなった赤ちゃんや、小さな子どもたちの遺体が並んでいました。死者はこれだけで550人もいたと伝えられています。



継承の思い受け取った



自分の空襲体験を描いた紙芝居を上演する中埜さん(撮影・植田耕太)

平和な未来 紙芝居で訴え

呉空襲を子どもたちに伝える試みを取材しました。紙芝居「ふうちんのそら」は、当時7歳だった中埜房江さん(70)が呉市焼山ヶ丘IIの実際の体験を描いたものです。呉市の絵本作家、よこみちけいこさん(44)たちがおことし作り直しました。

軍港の歴史 教わった

なぜ、呉市は爆撃されたのでしょうか。大和ミュージアムを訪れて、学芸員の杉山聖子さん(38)から軍港として栄えた街の歴史と、空襲の被害について教わりました。



大和ミュージアムで呉空襲について説明する杉山さん。焼夷弾なども展示する(撮影・沖野加奈)

軍艦建造次々 米の標的に

「日本全体が軍国主義へと進む中、軍港だった呉が何度も空襲を受けた。歴史を学んだ上で、平和と何かを考えてほしい」という杉山さんの説明を聞きながら、地域と戦争との関わりをあらためて考えました。